

旧約聖書を読んで感じること(109) コヘトの言葉「空しい」

口語訳聖書では「伝道の書」だった書名が新共同訳聖書では「コヘトの言葉」に変わりました。著者は「伝道者」から、「コヘト」に変わり、欽定訳では preacher、現代訳では philosopher となっています。コヘトとはヘブライ語で、元来の意味は「集まる人・集める人」とのことですが、伝統的に、「説教者、伝道者」と訳されてきたそうです。さて、新共同訳聖書の巻末に『コヘトの言葉』は、死に運命づけられた人間の生の意義について考えた、ある知恵者の書である」と解説がなされています。「生の意義とは」と勢い込んでページを開くと、冒頭から驚かされます。

コヘトは言う。なんという空しさ／なんという空しさ、すべては空しい。コヘトは言う。なんという空しさ／すべては空しい。(コヘ1:2)



「すべては空しい」と言うソロモン Isaaq Asknaziy

何度も「空しい」と繰り返し、最後にもなんと空しいことか、とコヘトは言う。すべては空しい、と。(コヘ12:8) 言うのです。この結論に至った動機と言うのは天の下に起こることをすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べた...見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであった。(コヘ 1:13)

知恵によっては心に満足が得られなかったと嘆いているようです。コヘトの知恵によって知り得たことは、「知者も愚者も等しく死に、死後どうなるのかわかりえない」ということでした。それは

人間の被造物としての限界を吐露したと言えるでしょう。「空しい」という言葉にはいろいろなニュアンスがあります。虚無主義としてとらえれば、真理や道徳的価値に客観的な根拠を認めず、空しいと言う人もいます。ニヒリストは現実を否定、あるいは逃避し、反抗し、空しいと言うでしょう。

コヘトが言う「空しい」は ①中身がなく無である ②根拠がない ③内容が充実していない ④無駄、無益である ⑤頼りにならない、つまらない ⑥事実がない など、どれでしょうか。英語訳では vanity、useless とされていますので、コヘトは④、⑤の意味で用いたのでしょうか。知恵に頼っても無駄、知恵はあてにならないという結論でしょう。

私の母方の祖母は禅宗の仏教徒でした。毎朝、早朝に仏壇の前で般若心経を読みました。「クウ〜、クウ〜」という言葉が何度も聞こえました。それは「色即是空」の部分だったのでしょうか。「空」は日本人にはなじみ深い言葉ですが、仏教の「空」は空しさではないようです。「色」とは存在する宇宙のすべての物質や現象を指すが、実体として存在せず、時々刻々と変化している。その根源には目には見えない不変のエネルギーがあり、それを「空」と呼ぶ。一切が「空」であることを悟れば、「色」とらわれることはない。(解説 大藪正哉)「般若」とは知恵という意味だそうです。「色即是空」とは人間を宇宙的エネルギーと融和させる宗教観だと思えます。空しさどころか、涅槃の心境といえるでしょう。

コヘトはあくまでも限界のある人間として立ち続けている点で、般若心経の世界とは違っています。知恵によっても、限りある命の充実は保証されない。知恵によっても、生きる喜びは得られない。知恵によっても、心に平安は訪れない、と自分のこれまで依って立って来た価値、知恵の高貴さが崩れたことを嘆いているのです。知恵によって得た人生と、知恵のない者が満足し、喜んで生きている現実の姿を対比させ、どちらが幸せであろうかと問うた時、今までの自分の知恵頼みの人生が空しく思えたときコヘトは正直に記しているのです。